

豊田市域の地理学的考慮

中 神 亮 子

豊田市域の地理学的考察によってわかったことを簡単に要約する。
地形に関して

- (1) 台地平坦面の一つ下位面（越戸面）は鼈川以北にもなく存在していること。
- (2) 当地域に広く分布する赤色土壌について、最上位面を構成するものが最も赤く以下の平坦面と明瞭に区分されるが、上位面と中位面の赤色土壌は当地では区別がつけられない。これに対し下位面を構成するものは色が薄く灰色を示しており、明らかに上の三面とは異なる。
- (3) 矢作川左岸には矢田川累雷の堆積面である丘陵（丘陵平坦面）と対比される面が存在していると考えられる。
人文に関しては次のような事がいえる。

- (1) 豊田市域一帯は三河に含まれるが、この三河を含む愛知県一帯の先進的特徴を当地域ももっていること、すなわち歴史的に眺めていくと(a)近世より城下町として又、矢作川の舟運により都市的商業的機能が発達し、挙母を中心に一つの商業圏を確立していたこと、(b)明治ノ2、ノ7年には先進的農業の基盤となった農業用水（明治用水・枝下用水）が建設されたこと、(c)前述した商業的機能の蓄積によりいち早く養蚕業の中心取引地として製糸工業を発展させたこと、(d)昭和ノ3年に町の発展の原動力としてトヨタ自工を誘致したこと、(e)戦後昭和26年～昭和33年頃まで豊田市域の農業生産物の販売先が関西市場と固く結びついていたこと等に豊田市域の先進性が一関してあらわれていると考えられる。

このような先進性をもった動きの中で豊田市域の地域現象はどのようなものであったか。

- (2) 豊田市域の中心産業は工業にあり、工業都市としての性格が強いこと。
- (3) その工業は総合工業である自動車工業を中心とし、トヨタ自工という巨大な核をもっていること。
- (4) 豊田市域において工業都市としての性格が強くなったのは、昭和34年から36年にかけてトヨタ自工の設備投資による拡張と元町工場を含めた関連工場が進出したときであり、工場の多くは台地上に立地した。
- (5) 又、これにより新興工業地帯が豊田市域南部に形成されたが、豊田市域

北部はまだ若干紡績・木材等を中心とした在来的工業の性格が存在する。
(6) 工業発展の中において労働者（臨時工）の身分の不安定さが大きな問題であること。

このような工業的色彩の強い豊田市域において農業における特徴は、

(7) 農業人口の流出がはげしくこれに対し農家の減少は少なく、全国的傾向と一致して兼業農家の増大が著るしい。

(8) 農業人口の急速な流出にもかかわらず農地の流動性は低く、50a ~ 1haの兼業可能な段階に平準化して停滞していること。

(9) 一方前述した昭和34年から36年の間の工場進出のpeakに農地転用のpeakがあり、過去10年間に全農地の8%が転用され農地の減少がはげしい。又畑畑別にみると畑の転向が大部分をしめる。

(10) このような状況の中で豊田市域の農業生産は、多くは兼業でも可能な粗放的商業的農業をめざしている。一部には専業化した主地集約的商品農業を行なう農家も点在する。

(11) この粗放的、商業的農業の中においても米作が根本にあることはいうまでもないが、青果物においては粗放の可能なかんらん・玉葱・キュウリなどの栽培が増え、スイカの作付面積は減少しつつある（ただし現在でもスイカの作付面積は他を圧倒している）。又畜産物においてもやはり兼業可能な鶏・豚などが増加している。

(12) 以上の背景には大きくトヨタ生協が存在している。すなわち、昭和33年まで輸送園芸を中心として関西市場と結びつき大々的に発展していたが、昭和34年以降工場進出を契機として農業生産物の絶対額を減少しながら、昭和31年にできた豊田生協との契約栽培により、市場的結合が強くなったためであり、挙母農協の販売額のお割を占めている。

(13) すなわち昭和33年まで西三河一帯の先進的農業地域と同じように全国的市場をめざした生産を行っていたのに対し、現在ではみずからの地域にトヨタ自工という大きな核が存在し、それが発展したがゆえに農業にもトヨタ生協という市場的な核ができあがり、西三河一帯の動きとは異なる方向を呈しだしている。

(14) 今後、豊田市域の工業の発展とともに、農業人口の流出・農耕地の減少傾向は尚続くものと思われ、ここに全国的傾向と一致して豊田市域の農業における問題が存在する。

以上のように豊田市域は歴史的にも先進性ゆえにトヨタ自工という工場

を誘致したが、これが昭和34年以降大きく開花し、この巨大な核により豊田市域は著しく影響をうけ、今まで存在していた地方商業都市、農業地域としての性格がぬりつぶされようとしており、現在、いわゆる工業都市への過渡期的地域現象があらわされているといつてよい。

藤沢市御所見地区の地理学的考察

細谷陽子

御所見地区は藤沢市の西北部に位置し、相模野台地南西部の一部を占める農業地域であり、調査はこの地域の性格を農業から把握することを目的とした。

相模野台地は、多摩丘陵と相模川の間にひろがり相模湾に面している洪積世の台地で、第三紀の凝灰質砂岩からなる三浦層群の基盤の上に堆積した旧相模川の河成堆積物によってつくられ、台地表面は一面にローム層におおわれている。このローム層は場所により厚さが異なり、ローム層のちがいがから、台地面は、それぞれ下末吉面、武蔵野面、立川面に相当すると思われる3つの形成時の異なる面に区分され、これらの面の開析のちがい、ロームの厚さのちがいは土地利用にもある程度反映しているが、いずれも農業的土地利用が支配的である。

御所見地区は、人口約5,700人、世帯数1,023のうち農家が641戸（昭和38年）という地域で、産業別就業人口でも第一次産業（ここでは農業のみ）が60%近くを占めているが、兼業農家は53%位で年々増加の一途をたどっている。

古くから台地をさざむ沢山の小さな谷に面して谷戸集落ができていたが、中世以後、台地上にも集落ができ、江戸時代には現在を中心地となっている部分が小さな宿場町としての機能を果たした他は農業のみが行われていた。明治以降、高座那の中間部という位置、即ち鉄道線からはいずれも離れてはいるが、東海道線藤沢、平塚、小田急線長後、本厚木に出られることから、自給的色彩は濃かったが、蔬菜、養蚕などの商品生産もかなり行われてきた。しかしながらその農業経営の特色は陸稲・麦・甘藷に重点をおいた主穀作で、現在に至るまでこの傾向が強く、県内の湘南・三浦半島その他、商品化の進んだ地域と区別される。

農業面における本地域の後進性の一つの原因として甘藷のやみ売りという安易な形で比較的多くの現金収入を得てきたために農家が戦後、全国的に問